

絵本における日英語の推移表現の比較

—〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の観点から—

尾 野 治 彦

目 次

はじめに	“When S1, S2” (立体描写)
第1章 認識の原点としての語りの場	4.1.3 「スルト」
第2章 「時」の推移表現	4.2 S2の内容の先取りを表す but
2.1 「なる」	4.3 結果の先取りを表す until
2.2 「やがて」「しばらくすると」「そのうち」「まもなく」	4.4 行動の先取りを表す「目的を表す to 不定詞」
2.2.1 「やがて」	4.5 時・条件・理由を表す副詞節の生起位置の比較
2.2.2 「そのうち」	4.6 同時進行の活動を含む事象表現における平面性と立体性
2.2.3 「しばらくすると」	4.7 「臨場的スタンス」と「紙芝居的手法」
2.2.4 「まもなく」	4.8 事象の推移としての「なる」
第3章 「時は流れる」と“Time flies”	第5章 「時の流れ」の方向性に係わる日英語の語法の相違
第4章 「事象」の推移表現	第6章 〈臨場的スタンス〉と日本文化の係わり合い
類像性の原理における日英語の比較—平面性と立体性—	第7章 むすびにかえて
4.1 「S1するト、S2」と「S1。スルト、S2」	
4.1.1 出来事連鎖構文としての「S1するト、S2」と英語の対応表現	
4.1.2 「S1するト、S2」(平面描写)と	

はじめに

これまで、英語と日本語の違いのひとつとして「する」と「なる」の対比ということがよく言われてきた。例えば、「する」的表現の“I have decided to get married.”と「なる」的表現の「結婚することになりました」との対比である。もっとも、この違いが指摘された段階では、「れる・られる」との関連において、日本語は、英語と比べ、いわゆる自発型の表現を好む言語であるという理解であったように思われる¹⁾。

しかし、日本語表現の特徴は、「なる」だけに限られるのではない。この他にも、英語が名詞中心構文で結果志向的であるのに対し、日本語は動詞中心構文でプロセス志向的であるとか²⁾、また、擬態語・擬声語が多いことや、物語において、英語の過去時制に対応する表現が、夕形ではなくル形が用いられるといったことなども大きな特徴としてあげられてきた。しかし、このような特徴は、何らかの共通した基盤から生じていると考えるべきであろう。

本稿では、「なる」表現をも含めたこれらの日本語表現の特徴に対し、統一的な観点からの説明を試みることにするが、その前に、まず近年の日英語比較研究の分野においては、池上の『「する」と「なる」の言語学』(1981)以来、これまでおびただしいまでの研究成果があったことを言うておかなければならない。

主だったものだけでも、澤田の「内的描写・外的描写」(1993)をはじめとして、池上(2004)(2005)の「主観的把握」「客観的把握」、中村(2004)の「Iモード」「Dモード」、本多(2005)の「エコロジカル・セルフ」、早瀬(2007)の「内」と「外」の視点」等をあげておかねばならないが、これらの認知言語学的な観点からの考察による貢献はめざましいものがあり、この分野は新たな研究段階に入ったといえるほどである³⁾。また、これらの研究以外にも、柳父(1979)や森田(1998)の一連の研究や、「場」の重要性を指摘したメイナード(2000)、「虫の視点」「神の視点」の金谷(2004)等も、日英語の本質を捉えたすぐれた研究とし

てあげておく必要がある。

さて、これらの諸研究の中で、本稿がもっとも関心があるのは、日本語表現の特徴の一つともいうべき「なる」が、現在の段階で、どのように捉えられているかということであるが、次の池上（2005）の見解が、現時点での「なる」についての最も新しい捉え方ということになる。

- (1) 〈主観性〉の指標ということについて言うならば、例えば筆者自身が以前日本語について提案した〈ナル〉的な言語という特徴づけ（池上 1981、Ikegami 1991 など）も、実は〈主観性〉の指標の一つとして受け止めてよいことである。〈認知の主体〉としての話者が Neisser の言う〈環境論的自己〉として臨場的なスタンスをとるならば、言語化の対象になるのは話者にとっての環境の見え（および、その変化）であって、話者自体は言語化の対象にならない。……なお、〈コト〉志向的と、もう一つつけ加えてよければ、以前筆者が日本語の行為動詞について指摘した〈有界的〉(bounded)よりも〈無界的〉(unbounded)―あるいは、〈結果中心〉(goal-oriented)よりも、〈過程中心〉(process-oriented)―に傾斜するという振舞い方での特徴（Ikegami 1985, 1988）も、実は日本語の話し手が臨場的なスタンスで事態把握する傾向が強いということと密接な関連があるように思える。行為の過程に身を置いた当事者にとっては、自らの行為が意図した結果を生むところまで行くか、行かないかは量り知る術もないわけである。（池上 2005：53、下線部筆者）

〈臨場的スタンス〉という語は、上の(1)の引用からとられたものであるが、この概念は、「主観的把握」や、中村（2004）のいう「Iモード」とほぼ等しい概念であるといえる。しかし、現場に臨場する語り手が「時の推移」をどのように捉えるのかを問題にする本稿においては、「主観的把握」よりは、〈臨場的スタンス〉という用語のほうが、よりふさわしい

ネーミングであると考えられ、本稿ではこの語を用いることにしたい。また、これに対立する概念としても、「客観的把握」や「Dモード」という名称ではなく、〈外置的スタンス〉⁴⁾という用語を新たに用いることにする。

本稿は、先に述べた「なる」をも含めた日本語に特徴的な表現の共通した基盤を〈臨場的スタンス〉の中に求めようとするものであるが、特に、推移表現にしぼって、〈臨場的スタンス〉がこの表現にどのように関わっているのかを、それに対応する英語表現と比べながらみてみることにしたい。

なお、一言つけ加えておこならば、本稿で用いられた例文は、すべて、絵本からとられているが、これは、絵本での例文が日英語の最も基本的な用法を表していると考えられるからである。

第1章 認識の原点としての語りの場

まず、語り手が、物語の進行しているまさにその現場に臨場して語るということは、現場の語り手が、時間指示の原点となることを意味する。このことは、「いま」「きょう」といった語が、物語世界での「いま」「きょう」を示すことになる。

もちろん、英語でも、today が物語現場の today を表す、次の(2)のような例はある。

(2) みんな ごきげん

きょうは いいてんき。 (『ぞうくんのさんぽ』：27)⁵⁾

But everyone is feeling happy,

for today is a beautiful day.⁶⁾ (Elephee's Walk : 27)

しかし、このような例はむしろ少なく、英語では、以下の例のように、「いま」「きょう」が訳出されない場合のほうが多い。これは、英語では、

「認知した事象をある時間軸の1点を基点として客観的な視点からそれらを構築して表現」(小澤 2006: 581) するためである。つまり、語り手の認識の原点は現場時ではなく発話時にあることになり、物語の出来事はすべて過去のこととして語られることが多いのである。

- (3) じゃんぐるでは、ぐるんぱを かこんで、いま かいぎの まっさいちゅう。
(『ぐるんぱのようちえん』: 4)

In the jungle one day, all the elephants gathered around Groompa for a meeting. (Groompa's Kindergarten: 4)

- (4) きのうも きょうも ずーっと あめが ふっています。
そらまめくんたちは あまやどり。

(『そらまめくんとめだかのこ』: 1)

Big Beanie and his friends were waiting in their little hut for the rain to stop. It had been raining since the day before.

(Big Beanie and the Lost Fish: 3)

- (5) ことし はじめての ゆきが ふりました。

(『ゆきのひの ころわん』)

Barney wakes up to see the first snow of the season.

(Barney's First Snow)

逆に、次の英語原文に対する日本語訳には、原文にない「きょう」が新たに訳出されている。

- (6) Rosie made Kate promise not to tell anyone what had happened.

(The Best Present)

ロージーはケイトに、きょうのことはだれにもいわないように
たのみました。(『いちばんすてきなプレゼント』: 19)

また、場所の指示においても、日本語では語り手が認識の原点となった指示詞が用いられるが、英語ではそのような指示詞は訳出されないことが多い。

- (7) そらまめくんの たからものは このベッド。

(『そらまめくんのベッド』：2)

Big Beanie's treasure is his bed. (*Big Beanie's Bed* : 2)

- (8) こどもたちは おおよろこび。うたを きいて、あっちからも
こっちからも こどもが あつまってきます。

(『ぐるんぱのようちえん』：24)

The children loved it. More children came to hear him sing.

(*Groompa's Kindergarten* : 24)

次は、英語原文の例であるが、原文にない指示詞が日本語では訳出されている。

- (9) Swish! Swish! went the air brakes on the express trains.

(*Choo Choo*)

あっち こっちで、きゅうこうれっしゃの えあぶれーきが、しゅ
しゅっと うなっています。(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

それゆえ、日本語では、時間と空間の指示においては、常に、語りの場が認識の原点となり、そこには、現場の「生きた時間」⁷⁾が流れているということになると思われる。これは、小澤 (2006 : 581) の言を用いるならば、日本語においては、語り手が、「認知した事象を自分自身の「イマ・ココ」に結びつけて表現」しているということになる。

第2章 「時」の推移表現

2.1 「なる」

まず、次の例をみてみることにしよう⁸⁾。

- (10) なつになって、とこちゃんは、おとうさんと おかあさんと いっしょに うみへ いきました。 (『とこちゃんは どこ』: 12)
In the summer, Toko, his mother and his father went to the beach together. (*Where is Little Toko?*: 12)
- (11) あきになって、いなかから おばあちゃんが きました。 (『とこちゃんは どこ』: 17)
In the fall, his grandmother, who lives in the country, came to visit. (*Where is Little Toko?*: 17)
- (12) ゆうがたになると、てのあいている ひとたちは、かんばんに ならんで、がっそうを した。 (『うみのがくたい』: 2)
In the evenings, the ones who had finished work would line up on the deck and play. (*The Ocean-Going Orchestra*: 2)
- (13) よるになっても ベッドが かわかないので きょうは⁹⁾、はっぱの ふとんで ねむることにしました。 (『そらまめくんとめだかのこ』: 28)
Their beds were still wet in the evening so Big Beanie and his friends decided to sleep under a leaf. (*Big Beanie and the Lost Fish*: 30)

このように、日本語の「なる」の推移表現が、英語では、in the summer や in the fall、in the evening といった、単に時を指定する表現で訳出されていることは注目すべき現象であるといえる。まず、「時の推移」を体験するには、現場の認識主体が「生きた時間」を体感しうる〈臨場的スタンス〉であることが求められるが、これらの「なる」表現は、〈臨場

的スタンス〉の持続が、現場の「時の推移」を、「変化の気づき」として把握した「感覚体験」を表していると考えられる。一方、〈外置的スタンス〉の英語においては、そもそも「時」を現場での「生きた時間」として体感しえないため、「時の推移」の感覚はありえないということになる。「なる」に対応する英語表現が推移の意味合いを欠いた表現となっているのはそのためである。推移の感覚のニュアンスは、あくまで、現場に臨場する〈臨場的スタンス〉の持続によってこそ、はじめて可能になる感覚なのである。

次は、逆に、英語原文での時の指定表現が、日本語では、「なる」と「体験的」に捉え直されている例である。

- (14) Summer had been especially nice.

(*The Fall of Freddie the Leaf*)

夏になると フレディは ますますうれしくなりました。

(『葉っぱのフレディ』)

- (15) They were coated with a thin layer of white which quickly melted and left them dew drenched and sparkling in the morning sun.

(*The Fall of Freddie the Leaf*)

みんなの顔に 白く冷たい粉のようなものがつきました。朝になると 白い粉はとけて 雫が キラキラ光りました。

(『葉っぱのフレディ』)

よって、この節については、次のようにまとめられると思われる。

- (16) 現場の「生きた時間」を体感する〈臨場的スタンス〉の持続は、「時の推移」を「変化の気づき」の体験として捉え、この感覚体験が「なる」という表現になって表れる。一方、〈外置的スタンス〉に立つ英語では、そもそも、現場での「生きた時間」を体感しえ

ないため、「時の推移」を体験として捉えることができない。

2.2 「やがて」「しばらくすると」「そのうち」「まもなく」

語りの現場での時の推移に対する臨場的・体感的な感覚は、「なる」だけではなく、「やがて」のような副詞にも表されていると考えられる。一方、「時の推移」を体感できない〈外置的スタンス〉の英語では、「なる」の場合のように、この種の推移表現のニュアンスを表すことの難しさが予想される。

2.2.1 「やがて」

まず、次の例をみてみよう。

- (17) やがて、行手にぼつりあかりが一つ見え始めました。
(『手ぶくろを買いに』：12)
Eventually, they noticed a small point of light on the path ahead.
(*Buying Mittens* : 12)
- (18) やがて町にはいりましたが (『手ぶくろを買いに』：18)
Finally, the little fox came to the village.
(*Buying Mittens* : 19)
- (19) やがて、くじらが ふとい こえて いった。
(『うみのがくたい』：14)
After a while the whales said in great big husky voices,
(*The Ocean-Going Orchestra* : 14)

これらの例において、「やがて」に対応している eventually, finally は、あきらかに時の推移の結果表現であり、after a while についても、after の語が示すように、現場での生きた時間の推移は表さず、やはり、結果

に焦点が置かれた表現である。それに対し、「やがて」に感じられるのは、現場で一方方向に流れる、「生きた時間」である「時の推移」の体感である¹⁰⁾。

次の例は、「やがて」が「なる」と共に用いられ、現場の「時の推移」の感覚がよく表された表現といえる。これに反し、英訳である before long は、あくまで、発話時からの分析的表現というべきである。

- (20) やがて、あさになりました。 (『ねずみのおいしゅさま』：18)
Before long, it was morning. (Dr. Mouse's Mission : 18)

このように、「やがて」が表す現場での時の推移の感覚を英語で訳出することは難しく、次のように、「やがて」が訳出されない場合も多い。

- (21) やがて、さかなたちの おんがくは、しずかに やんだ。
(『うみのがくたい』：25)
The orchestra of the fishes fell silent.
(The Ocean-Going Orchestra : 25)

一方、次の英語原文の例においては、at last, soon, then といった表現が、すべて「やがて」と訳出されている。

- (22) At last they came to the place where the tracks divided.
(Choo Choo)
やがて、ジムたちは、せんろが ふたまたに わかっている ところまで きました。 (『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)
(23) Soon he discovered that no two leaves were alike, even though they were on the same tree. (The Fall of Freddie the Leaf)

やがて、ひとつとして 同じ葉っぱはないことに 気がつきました。
(『葉っぱのフレディ』)

- (24) Then the owl pumped its great wings and lifted off the branch
like a shadow without sound. (*Owl Moon*)

やがて みみずくは おおきなつばさ うごかして 音もなく
影のように えだをはなれ 森のおくへと かえっていった
(『月夜のみみずく』)

これらの日本語訳に、英語の直訳である「とうとう」「すぐに」「その後」ではなくて、「やがて」が用いられたのは、臨場する語り手の「推移の感覚」が優先されたためである。

さらに、次の日本語訳においては、英語原文にはない「やがて」が新たに付け加えられている。実際、この日本語訳における「やがて」の使用はきわめて自然であると思われるが、これは、この例のコンテキストが、「時の推移」を感じるのにふさわしい状況であるためと考えられる。

- (25) Year followed year....

The apple trees grew old and new ones were planted
(*The Little House* : 12)

くるとしも、くるとしも……

やがて りんごの木は としをとり、
あたらしいのに うえかえられました。(『ちいさいおうち』: 12)

2.2.2 「そのうち」

「そのうち」は、ソ系の持つ指示詞的な意味も持ち合わせており、現場指示がはっきり表れている時の推移表現と考えられる。

- (26) ところで そのうち、ふねのひとたちは、おかしなことに きがついた。
(『うみのがくたい』：2)

And then, after a while the crew noticed something odd.

(*The Ocean-Going Orchestra* : 2)

- (27) でも そのうち、ベッドよりも たまごのほうに きになってきました。
(『そらまめくんのベッド』：22)

But soon he became more curious about eggs than his bed.

(*Big Beanie's Bed* : 22)

すでに前節で述べたように、after a while は、時の推移の結果を表す表現であるが、soon についても、この語の “before long”, “within a short time” の定義からわかるように、時の推移の結果表現であるといえよう。

一方、次は、finally が「そのうち」と訳出されている例である。

- (28) Finally they saw a little hill in the middle of a field...

(*The Little House* : 37)

そのうち、ひろいのはらの まんなかに ちいさな おかが 見つかりました。
(『ちいさいおうち』：37)

興味深いと思われるのは次の例である。

- (29) Finally she came to where the tracks divided. (*Choo Choo*)

そのうち、とうとう、せんろが ふたまたに わかれている ところに きました。
(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

Finally に対する訳語は「とうとう」であるが、日本語訳には、英語原文にはない、「そのうち」が新たにつけ加えられている。これは、「とうと

う」(finally)で述べられる事態に至るまでの、現場での時の推移の感覚が臨場的に体験されたためと考えられよう。

さらには、「そのうち」と「とうとう」がいっしょになった次のような例もある。

- (30) And after a while he gave up. (*Farfallina & Marcel*)
そのうちとうとう あきらめてしまいました。
(『ファルファリーナとマルセル』)

2.2.3 「しばらくすると」

「しばらくすると」においても、「スルト」がこの語の中にあるように、現場での推移が感じられる(「スルト」については、4.1.3節を参照のこと)が、訳出された英語表現には、現場の推移の感覚は感じられない。

- (31) 「ほら、ここで ひるねが できるよ」 しばらくすると、みんなは ことりのこえを ききながら きもちよく ねてしまった。
(『ことりのうち』: 32)

“OK, everybody, we can snuggle together and take our nap right here.” And while listening to the sweet sounds of the birds singing, they fall asleep.

(*Grandma Baba's Bird's Nest!* : 32)

- (32) しばらくすると、オットセイのくちから、シャボンだまがひとつ、でてきた。
(『おふろだいすき』)

A few moments later, one tiny bubble came out of his mouth,
(*I Love to Take a Bath* : 15)

逆に、次は、英語原文での after a while が、「しばらくすると」と臨

場的に訳出されている例である。

- (33) After a while the little black rabbit sat down, and looked very sad. (The Rabbits' Wedding)

しばらくすると、くろいうさぎは すわりこみました。そして、
とても かなしそうな かおをしました。

(『しろいうさぎとくろいうさぎ』)

2.2.4 「まもなく」

「まもなく」にも、現場での時の推移の感覚が表れていると考えられるが、次の(34)の英訳には、推移のニュアンスは表われていない。

- (34) 間もなく 洞穴へ帰って来た子狐は、 (『手ぶくろを買いに』: 8)
Returning to his cave, the little fox said,

(Buying Mittens : 8)

次は、英語原文での after a while や now が、「まもなく」と推移的に訳出されている例である。

- (35) After a while they arrived at a great snow castle. (Olle's Ski Trip)

まもなく、ふたりはりっぱな雪のお城につきました。

(『ウツレと冬の森』)

- (36) Now they were right in the center of the town. (Curious George Takes a Job)

まもなく、ばすは まちの まんなかへ きました。

(『ひとまねこぎ』)

次の(37)の英語原文での“not...before”は、〈外置的スタンス〉による分析的な表現であるが、日本語訳では、「まもなく」が用いられた臨場的な表現となっている。

(37) They didn't go far before they saw the little engine.

(Choo Choo)

まもなく、ちいさい きかんしゃが みえてきました。

(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

さらに次の(38)の英語原文に対する訳文でも、〈臨場的〉に時の推移が体験され、原文にはその相当表現がない「まもなく」が新たにつけ加えられている。

(38) He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks.

まもなく あおむしは、さなぎになって なんにちも ねむりました。(『*The Very Hungry Caterpillar*／はらぺこあおむし』)

これまで述べた副詞の推移表現については、次のようにまとめられると思われる。

(39) 「やがて」「そのうち」の英訳として after a while が用いられ、また after a while の和訳として「しばらくすると」「まもなく」が用いられていることは、〈外置的スタンス〉の英語が、これらの〈臨場的スタンス〉による推移表現のニュアンスを訳出することの難しさを示している。また、これらの日本語原文での推移表現は英語では訳出されない場合も多い。逆に、英語原文に対する日本語

訳では、「時の推移」が〈臨場的〉に「体験」され、これらの推移表現が新たにつけ加えられる場合もある。

第3章 「時は流れる」と“Time flies.”

次の(40)は、インターネットからの「時は流れる」と「時は飛ぶ」の用例総数の比較であるが、日本語では体感的な感覚ともいうべき「時は流れる」が、抽象的な感覚ともいうべき「時は飛ぶ」よりも圧倒的に多いが、これは、「時の推移」を臨場的に捉えることの表れと考えられる。また、(41)が示すように、英語では、全く逆に、“time flies”が“time flows”よりも、圧倒的に多いことはきわめて興味深い現象であると言わねばならない。この違いには、少なからず、「時」に対する〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の捉えかたの違いが反映されていると考えることは十分可能であろう。(Yahoo! Japan、2007年12月25日のサーチによる。なお(40)については「日本語、日本」、(41)については「英語、アメリカ」による検索結果である)。

(40)	時は流れる (順番も含め完全に一致)	82,000 件
	時は飛ぶ (順番も含め完全に一致)	511 件
(41)	time flows (順番も含め完全に一致)	135,000 件
	time flies (順番も含め完全に一致)	2,690,000 件

あえていうならば、日本語文化においては「時は流れる」のであるが、英語文化においては、「時」は、「流れる」のではなく、“fly”（「飛ぶ」）のである¹¹⁾。

第4章 「事象」の推移表現

類像性の原理における日英語の比較—平面性と立体性—

「なる」や「やがて」は、「時」の「推移」を「体験的」に把握した表現であることをみたが、このような〈臨場的〉な把握の仕方は、「事象」の推移についてもあてはまることが予想される。もしそうであれば、事象の推移は、時の推移に沿って表現されることになり、「生じた出来事の順序（記号内容）と接続される節の順序（記号表現）」（坪本 1998：107）とが一致する、いわば、類像性の連続性の原理に従うことになる。事象の推移に対する、このような捉え方は、「時の推移」の場合のように、臨場的スタンスによる「体験的」な把握であるが、また、同時に、「平面的」な把握であるともいえる。なぜなら、事象の推移に沿うままの一方方向の表現は平面的なものになると考えられるからである。これに対し、物語での内容がすべて終わったとの前提で語られる〈外置的スタンス〉の英語においては、言語表現は事象の推移に沿うものである必要はなくなり、よって、出来事の順序と表現される順序の平行性にはこだわらない「立体的」な把握が予想されることになるが、立体的把握は分析的把握であるともいえ、現場の事象の推移の「体験的」な把握ではありえない。

以下、事象の推移表現に関連し、日本語表現と英語表現を「平面性」と「立体性」の観点からみていきたい。ちなみに、安井（1997：28）は、「英語の感じは寄せ木細工的、日本語の感じは友禅流的」と述べているが、これは、けだし、英語の「立体性」と日本語の「平面性」の特徴を捉えた卓見といえる。

4.1 「S1 するト、S2」と「S1。スルト、S2」

物語における、出来事連鎖を表す構文として、場面から場面への移行を表す「S1 するト、S2」と「S1。スルト、S2」があげられるが、「するト」も、「スルト」も、共に、「ト」の前に、ル形が生じている点では共通している。どちらも、語り手が、語る状況の中に身を置き、場面から

場面への「知覚体験」を表す、いわば、「実況中継」のマーカースともいえる表現である。さて、英語ではこの用法にどのような表現が対応しているのかみてみることにしたい¹²⁾。

4.1.1 出来事連鎖構文としての「S1 するト、S2」と英語の対応表現

「S1 するト、S2」の文連結の性質については、坪本(1998)と中島(2001)がくわしいが、この構文には次の二つの用法がある。

- (42) a. 太郎はオーバーを脱ぐとハンガーにかけた。
b. 花子が玄関へ行くと、小包があった。 (坪本 1998: 120)

坪本(1998: 106)は、(42a)が「定方向」の「必然的な文連結」を表すのに対し、(42b)は「不定方向」の「偶然の文連結」を表すとしている。坪本や中島が扱っているのは、主に、「不定方向」を表す用法である。しかし、「定方向」であれ「不定方向」であれ、日本語の「S1 するト、S2」構文は、語りの現場での「認知状況の継起」(中島 2001: 116)という「体験」を反映しており、どちらも、平面的な描写を表している点で共通していると考えられる。よって、以下、「定方向」「不定方向」の区別にはこだわらず、「S1 するト、S2」構文とそれに対応する英語表現をみていくことにしたい。

もちろん、英語にも、(43)のように、場面から場面への「認知状況の継起」を表す平面的な表現も存在する。

- (43) 「おいしいもの たくさん もってきたからね」
みんなが しんばいしていると、とつぜん、ドアを ドンドン
たたく おとがした。 (『あひるのたまご』: 17-18)
“We’ve brought lots of yummys for you.”

All the animals are trying to cheer up Grandma Baba when suddenly……there is a thump on the door.

(*Grandma Baba's Birthday Party!* : 17-18)

しかし、このような対応表現はきわめて少なく、以下で述べるような、これ以外の多様な英語表現がより一般的であるといえる。

まず、次の例をみてみよう。

- (44) シャツや タオルを たばにして、あしに くくりつけて あるくと、ほら、ごみが あつまってきます。

(『ぐりとぐらのおおそうじ』 : 19)

Bunching up some towels and shirts in both hands and tying some to his legs, he starts beating the walls vigorously.

(*Guri and Gura's Spring Cleaning* : 19)

- (45) チョコちゃんたちが、むしゃむしゃ ぱくぱく おやつを たべていると からすの こどもたちが やってきて ききました。

(『からすのパンやさん』)

Seeing Coco and his siblings munch, munch, munching on their special-looking breads, the neighbor chicks said,

(*Mr. Crow's Bakery* : 10)

- (46) とのさまは、白馬をとりあげると、けらいたちをひきつれ おおいばりで帰っていきました。

(『スーホの白い馬』)

Then the Governor, taking the white horse, strutted home, followed by his guards.

(*Suho's White Horse* : 25)

これらの対応する英文においては、そもそも、場面から場面への移行という捉え方が全くされておらず、主語たる人物を中心とした出来事として単文で訳出されている。これは、〈外置的スタンス〉の英語は、事象か

ら事象への移行そのものを把握の対象とはしにくいためである。

次の例は、逆に、単文の英語原文が、日本語では「場面」から「場面」への推移的事象として連続的・平面的に捉え直されている例である。

- (47) Then we came to a clearing in the dark woods. (*Owl Moon*)
くらい森を くぐっていくと ぼっかり ひろい あき地があっ
た (『月夜のみみずく』)
- (48) Spring would follow Winter
(*The Fall of the Freddie the Leaf*)
冬が終わると春が来て (『葉っぱのフレディ』)
- (49) Whelan's Flower Shop was on the next street.
(*The Best Present*)
しばらく歩くと、「ウォーレンの花屋」がありました。
(『いちばんすてきなプレゼント』: 11)

4.1.2 「S1 するト、S2」(平面描写) と “When S1, S2” (立体描写)

先に述べた英語表現の他に、「S1 するト、S2」の対応表現としては、when や after の表現もよく用いられる。しかし、「S1 するト、S2」が、“When S1, S2” や “After S1, S2” に置き換えられると、「S1」と「S2」の場面と時間の連続性が保証されなくなり、「S1 するト、S2」構文の持つ「認知的な継起」の意味合いはなくなってしまう。(「と」と when の違いについては、注 12 を参照されたい。)

まず次は、平面的な「と」が、英語では立体的な when, after で処理されている例である。

- (50) おがわに つくと、みんなは めだかのこを そーっと はなし
てやりました。 (『そらまめくんとめだかのこ』: 25)
When they reached the stream, they gently let the little fish go.

(*Big Beanie and the Lost Fish* : 27)

- (51) せきに もどると、しゃしょうさんがきて、こんのしっぽに ほうたいを まいてくれました。 (『こん と あき』: 18)

After they returned to their seats, the conductor came by to bandage Ken's tail. (*Amy and Ken Visit Grandma* : 18)

- (52) ふりかえると そらには
おおきな にじが かかっていました。
(『あめの ひの えんそく』: 22)

And when we turn around,
there is a big rainbow in the sky!
(*The Rainy Trip Surprise* : 22)

逆に、次は英語原文の立体的な when に対し、日本語では平面的な「と」が用いられ、臨場的に処理されている例である。

- (53) When the crowd saw that Harry was a dog, they gasped.
(*Harry by the Sea*)

けんぶつの ひとたちは、ハリーが いぬだと わかると、びっくりしてしまいました。
(『うみべのハリー』)

- (54) This morning when I woke up
I felt good because the sun was shining.
(*Days with Frog and Toad* : 62)

けさ めを さますと
おひさまが てっていて、いい きもちだった。
(『ふたりはきょうも』: 62)

ちなみに、巻下(1979 : 324)は、日本文学の英訳において、“when S1, S2”, “S2 when S1”と訳出されている 95 例について、この when S1 の

英訳がどのような日本語原文に対応していたのかを調査し次の報告をしている。

(55)	A	B	C
	～(した、する)とき (含、のころ)	～(する)と	～すれば ～しても ～のところを (その他)
	16例 (17%)	41例 (43%)	38例 (40%)

この結果は、平面的な「と」が立体的な when で処理される傾向があることを示すものといえる。

よって、この節は以下のようにまとめられよう。

- (56) 臨場的・平面的な把握を表す「S1 するト、S2」は、英語では、外置的・立体的な把握を表す when や after を用いて捉え直され、逆に、when や after による外置的・立体的な英語原文が、「S1 するト、S2」と臨場的・平面的に捉え直される傾向がある。

4.1.3 「スルト」

次は、「スルト」の例である。「S1。スルト、S2」と「S1 するト、S2」との違いは、S1 と S2 の結びつきが、坪本のいう不定方向の文連結のみを表すということであるが、「スルト」は、現場の眼前性がより強調された表現形式といえる。

まず、次の例をみてみよう。

- (57) 「おおきくなあれ、おおきくなあれ」
すると、そらいろのいえは、すこしずつ おおきくなっていきま

した。 (『そらいろのたね』：7-8)

“Grow, grow, grow!” he said.

Little by little the sky blue house grew bigger.

(*The Sky Blue Seed* : 7-8)

- (58) すると、シャボンだまは、くるくるまわりながら、すこしずつ、
ふくらみはじめた。 (『おふろだいすき』)

Round and round, it grew... Bigger and bigger, it grew...

(*I Love to Take a Bath* : 16)

- (59) ぐりと ぐらは、ドアを あけました。

すると、おおきな ながぐつが あります。

(『ぐりとぐらのおきゃくさま』：10)

Guri and Gura carefully open the front door and walk into their house. The first thing they see is a very large pair of boots. (*Guri and Gura's Surprise Visitor* : 12)

これらにおいては、「スルト」の眼前性のニュアンスが英語には訳出されず、〈外置的スタンス〉の英語が、「スルト」の持つ意味合いを表すことの困難さが理解されよう。

逆に、次は英語原文では「スルト」に相当する語がないのに、日本語では、新たに「スルト」がつけ加えられ、「臨場の体験」の意味合いが生じている例である。

- (60) When the bus slowed down to turn into a side street, George jumped off. There was a restaurant right in front of him.

(*Curious George Takes a Job* : 14)

さすが、ゆっくり みを まがろうとしたとき、じょうじはとびおりました。すると、ちょうど めのまえに、れすとらんが

ありました。 (『ひとまねこざる』: 14)

(61) Toad put on the hat.

It fell down over his eyes. (*Days with Frog and Toad* : 42)

がまくんは ぼうしを かぶりました。

すると めまで かぶさってしまいました。

(『ふたりはきょうも』: 42)

(62) Horace sat down on a bench and watched.

“Come and play with us,” the littlest one called when she noticed Horace sitting by himself. (*Horace*)

ホラスは ベンチにすわって じっとみつめていました。

すると、いちばん小さな子が、ひとりぼっちのホラスに きがつかうて いました。

「こっちにきて、いっしょに あそぼうよ」

(『ママとパパを さがしに行くの』)

4.2 S2の内容の先取りを表す but

日本語では、「S1 すると、S2」の場合であれ、「S1。スルト、S2」の場合であれ、いわば現場のリアルタイムで語られるため、あとに続く事態がどのようなものであるかは、前もって知ることはできず、最後までサスペンスをもって語られることとなる。つまり、すでに先に(1)で引用したように、「行為の過程に身を置いた当事者にとっては、自らの行為が意図した結果を生むところまで行くか、行かないかは量り知る術もない」のである。一方、英語においては、S1 で述べられた事態が、S2 でうまくいかないときは、S2 の始まる前で but が用いられ、結果が先取りして示される場合が多い。これは、物語がすでに終わっているという前提で語られる〈外置的スタンス〉であればこそ可能な言い方であると考えられるが、逆に、そのような結果の先取りを明示することが、このスタンス

での表現の特徴であるといえるかもしれない。

まず次は、「S1 するト、S2」構文の英訳として、S2 の直前に but が用いられている例である。

- (63) みいちゃんが、うたを うたいながら いくと、ちりん ちりん、
べるを ならして、じてんしゃが きました。

(『はじめてのおつかい』：6)

Miki hummed a little tune as she walked along. But suddenly, she heard a “ring ring” coming straight towards her!

(*Miki's First Errand* : 6)

- (64) ぐらが えりまきを はずして、かけようとすると—もう まっ
しろな えりまきが かかっています。

(『ぐりとぐらのおきゃくさま』：13)

Gura takes off his scarf and goes to hang it up. But a long, snow-white scarf is already hanging from the hook!

(*Guri and Gura's Surprise Visitor* : 15)

- (65) 「わーい、きょうは あそべるぞー」と そとへ とびだしてみる
と、いつものあそびばが おおきな みずたまりになっていま
した。

(『そらまめくんとめだかのこ』：2)

“Yay! We can play today!” they shouted, but when they jumped out of bed to go outside, their playground was one big water puddle. (*Big Beanie and the Lost Fish* : 2)

次は、日本語原文の「スルト」に対して、but が用いられている例である。

- (66) ころわんは、こまって にげだしました。すると、こねこは な

きながら おいかけてきて、みずたまりで ばしゃん！

(『ころわんは おにいちゃん』：7)

Barney doesn't know what else to do, so he runs away from the kitten. But she runs after him, crying "Mew! Mew!" Suddenly — KERSPLASH! The little kitten falls into a puddle.

(*Barney and the Kitten* : 6)

しかし、このような、後に続く内容を暗示する but は、「S1 するト、S2」や「S1. スルト、S2」構文の英訳だけには限られず、(67) (68) のような文と文をつなぐ場合の英訳にも用いられる。要するに、後にどのような内容が続くのかをあらかじめ明示するのが立体的な〈外置的スタンス〉のレトリックなのである。

(67) この さわぎを きいた げたばこの げたや くつや かさも、みんな にげだしました。かあちゃんは、それを みて おおごえで さげびました。「とまれ！」

(『せんたくかあちゃん』：6-8)

The wooden clogs, shoes and umbrellas in their cabinet heard the rumpus and began running away too. But Sudsy Mom saw them all escaping and yelled, "FREEZE!"

(*Sudsy Mom's Washing Spree* : 6-8)

(68) 「こんばんは。こんばんは」「もしもし。もしもし」
みんな よく ねむっていて へんじをしません。

(『ねずみのおいしゃさま』：12-13)

"Good evening... Good evening... Hello? Hello there?"
But everybody was sound asleep and didn't say a word.

(*Dr. Mouse's Mission* : 12-13)

逆に、次の英語原文の例では、文頭の But は日本語に訳出されていない。

- (69) But next morning George's friend, the man with the big yellow hat, was buying his newspaper. Suddenly he got very excited.

(*Curious George Takes a Job* : 34)

つぎの あさ、じょうじの なかよしの きいろいぼうしのおじさんが、しんぶんを かって、おやっと おもいました。

(『ひとまねこざる』 : 34)

4.3 結果の先取りを表す until

事態の進行を現場のリアルタイムで語るとすれば、その結果は最後になるまでわからないことになるが、結果があらかじめわかっている英語では、結果が先に示された表現も可能となる。先の 4.2 節で論じた but が先行する事例はその一例であるが、until についてもそのようなことがいえると思われる。

つまり、日本語においては、事態の進行が、現場の時の推移に沿って平面的にリアルに再現されるのに対し、英語では、あらかじめ結果が立体的に until で明示され、よって臨場性は感じられないものとなっている。

- (70) あさえは、かながえ、かながえ、ずっとかながえつづけました。
「そうだ、そうしよう！」 (『いもうとのにゅういん』 : 18)

Naomi kept thinking and thinking until she had a great idea.
“That's it, that's what I'll do!” (*Naomi's Special Gift* : 18)

- (71) そらいろのいえは、それでも、おおきく おおきくなっていき、
とうとう おしろのように りっぱな いえが できあがりまし

た。 (『そらいろのたね』：17-18)
And the sky blue house still kept on growing larger and larger.¹³⁾ It kept on growing until it was a fine grand building like a castle. (The Sky Blue Seed : 17-18)

次は、英語原文の例であるが、until が日本語では臨場的に訳出されている。

(72) Jim and Oley and Archibald ran and ran till they could run no more. (Choo Choo)
ジムと オーリーと アーチボールドは かけて かけて ぐたびれて、もう これいじょうは かけられなくなりました。
(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

次は、until の和訳に「スルト」が用いられている例であるが、ここにおいては、until の〈立体性〉と「スルト」の〈平面性〉〈連続性〉の対比がよく表れているといえる。

(73), and he (the Whale) began to drink. He drank and drank until the land appeared. (Whale)
くじらは うみの みずを のみはじめました。がぶり ごぶりがぶがぶ ごぶり。すると すこしずつ りくちが みえてきました。
(『くじらのうた』)

4.4 行動の先取りを表す「目的を表す to 不定詞」

日本語の出来事連鎖表現の一部が、英語では目的を表す to 不定詞として述べられる場合がある。

- (74) そこで こねこは うちへ かえって かあさんねこの
おりょうりの ほんを かりて きました。

Kitten runs home to borrow his mother's cookbook.

(『おぼけのてんぷら/*Ghost Tempura*』：9)

- (75) まい朝、早く起きると、スーホは、おばあさんを助けて、ごはん
のしたくをします。 (『スーホの白い馬』)

He'd get up early in the morning to help his grandmother
prepare their breakfast..... (*Suho's White Horse* : 4)

次は、全く逆に、英語原文での目的を表す to 不定詞が、日本語では、一連の連続した動作として訳出されている場合である。

- (76) He had his supper and then sat down at his desk to write a
letter. (*Badger's Parting Gifts*)

夕ごはんをおえて、つくえにむかい、手紙を書きました。

(『わすれられない おくりもの』)

- (77) “I am going home now to bake a cake.”

(*Frog and Toad Together* : 41)

「ぼくは これから うちへ かえって おかしをつくるよ」

(『ふたりはいっしょ』：41)

(76)の例でいえば、“to write a letter”という表現は、なぜ、「机に向かう」のかがあらかじめわかっていなければ使えない表現である。巻下(1997: 36)は、「「……して～する」となっている原文から、英語話者がいわゆる「目的を表す不定詞」の表現を発想することに注意を向ける必要がある」としているが、ここには、一連の事象を時の推移にそって体験的に捉えようとする日本語と、一連の事象を、時の推移とは無関係に、

立体的に個々の動作の相互の関連性で捉えようとする英語との違いが表れている。

4.5 時・条件・理由を表す副詞節の生起位置の比較

次は、日本語では、副詞節の生起が連続性の原理に従って平面的に述べられているが、英語では事象が立体的に捉えられ、連続性の原理には従っていない例である。

- (78) グリーンピースの きょうだいの ベッドは みずを 入れたとたん、くのじに まがってしまいました。

(『そらまめくんとめだかのこ』：20)

The Green Peasley brothers' and sisters' bed drooped when it was filled with water. (*Big Beanie and the Lost Fish* : 22)

- (79) 「そのうち、ゆきが ふれば なおるさ。うんと ひやせるからね」
(『ねずみのおいしゃさま』：26)

“I'm sure my fever will get better when it snows. Then I can cool myself.”
(*Dr. Mouse's Mission* : 26)

- (80) ぐるんぱが くさいので、みんな はなを、そらに むけています。
(『ぐるんぱのようちえん』：4)

They kept their noses high because Groompa smelled.
(*Groompa's Kindergarten* : 4)

一方、次は英語原文の例であるが、対応する日本語訳では、平面的に連続性の原理に従った語順に並べ替えられている。

- (81) “Now I'll hide,” said Marcel when he found her. And he hid right behind the tree.
(*Farfallina and Marcel*)

マルセルは ファルファリーナを見つけると、「こんどは ぼくがかくれるよ」と言って 木のまうしろに かくれました。

(『ファルファリーナとマルセル』)

- (82) She did not have much coal or water left as she had lost her tender... (Choo Choo)

たんすいしゃが なくなったので、せきたんも みずも、あとすこししか ありません。

(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

- (83) I felt good because I was a frog.

(*Days with Frog and Toad* : 62)

じぶんが 1びきの かえるだ ということが、いい きもちだった。

(『ふたりは きょうも』: 62)

4.6 同時進行の活動を含む事象表現における平面性と立体性

現実の事象においては、いくつかの動作が同時に進行している場合があるが、その場合に、〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉では、それぞれ、どのような表現形式をとるのだろうか。

- (84) 豆太は、なきなき走った¹⁴⁾。 (『モチモチの木』: 74)

Mameta sobbed as he ran on. (*The Tree of Courage* : 23)

日本語原文には、豆太が「泣いている」動作と「走っている」動作が、同時に生じている臨場性が感じられるのに対し、英語表現では、sob と ran の活動がそれぞれ独立した主語をもち、別個の事象として分離されて表現されており、日本語表現の持つ臨場性は伝わってこない。

また、日本語では、2つの動作が同時並行的に生じる臨場感を表すのに、「ながら」がよく用いられる。

- (85) かなえは、ひとりで おはじきをしながら、つぶやきました。
(『とん ことり』：23)

Maya murmured, as she played alone with her glass beads.
(*Gifts from a Mailbox* : 23)

次は、英語原文の例であるが、「ながら」が用いられて訳出されている。

- (86) “Swish Swish” the waves sighed as they drew back into the ocean.
(*Where does Thursday Go?*)
スィー！ スィー！ なみは ためいきを つきながら、うみにもどっていきます。
(『もくようびはどこへいくの?』)

衣笠 (2004) 「時を表す as 節と階層構造」は、このような時を表す as 節が階層構造をなしていることについて述べた論文であるが、以下の (87) のような文については、(88) のような階層をなしているとしている。

- (87) ‘Do you want to stay at the house with me?’ he asked as she drove her home from the airport, and she looked pensive as she thought about it.
(衣笠 2004 : 21)
- (88) 発言 > 表情 > 心の動き・感情 > 動作
(衣笠 2004 : 21)

確かに、(88) の階層は、例えば、(84) の “sobbed as he ran on” についても、「表情」>「動作」はあてはまる。しかし、as 表現がこのような階層構造をなしていること自体、この表現が、分析的なものであって、体験的なものではないことを示しているといえよう。

4.7 「臨場的スタンス」と「紙芝居的手法」

場面の実況中継という点についていうならば、これは、絵本の場合だけの特徴とも考えられるが、あえて、ページの最後で文を完結せず、サスペンスをもたせて、次ページでその続きを完結させる用法がある。一方、これに対応する英訳としては、ページ内で文を完結する場合が多い。

(89) とこちゃんは、そのまに とことこかけだしてー

(『とこちゃんは どこ』: 3)

Toko began to pitter-patter and then wander away.

(*Where Is Little Toko?* : 3)

(90) 「わーい、すすめー！」と そらまめくんが さげんだとたん……

(『そらまめくんとめだかのこ』: 10)

Then Big Beanie shouted, “All right! Full speed ahead!”

(*Big Beanie and the Lost Fish* : 12)

(91) それから もうふと まくらを もってくるー

(『いそがしいよる』: 7)

Then she gets her pillow and blanket.

(*Grandma Baba's Busy Night!* : 7)

(92) 「うまい！」ぐりと ぐらが てをたたくと、

(『ぐりとぐらとくるりくら』: 10)

Guri and Gura clap and shout with joy, “Brilliant! Amazing!”

(*Guri and Gura's Magical Friend* : 10)

逆に、次は英語原文ではページ内で完結しているのに、日本語訳では、ページ内であえて完結させず、サスペンスを持たせて次ページに進んでいる例である。

(93) The shadow hooted again. (Owl Moon)

その影は また “ほーほう” とないた
そのとき (『月夜のみみずく』)

これらの用法は、いわば、意図的にサスペンスを読者に持たせて次の場面に進む、いってみれば、「紙芝居的」な手法ともいえるものであるが、この手法は、語り手が、事態の進行にそって、リアルタイムで語る〈臨場的スタンス〉であればこそ、その手法の威力がより発揮されることとなる。そもそも、後で述べられる内容が時間的に先行するのであれば、この手法そのものが成立しないといえる¹⁵⁾。

4.8 事象の推移としての「なる」

現場での時の推移に対する〈臨場的スタンス〉による体感が「なる」であると述べたが、事象の見えの変化に用いられる「なる」も、これまで論じた「時」の推移と同じように捉えられる。

(94) ぐるんばは、みちがえるほど りっぱになりました。
(『ぐるんばのようちえん』：9)

Groompa was soon sparkling clean.
(Groompa's Kindergarten : 9)

(95) どのへやも、ダンボールの はこで、いっぱいになりました。
(『とん ことり』：5)

Every room was filled with cardboard boxes.
(Gifts from a Mailbox : 5)

次は、英語原文に対する、日本語訳に表れた「なる」である。

- (96) He watched Mole and Frog for a long time, enjoying the sight of his friends having a good time. (*Badger's Parting Gifts*)
それでも、友だちの楽しそうなようすを、ながめているうちに、自分も、しあわせな気持ちになりました。
(『わすれられない おくりもの』)

ここで、注目すべきは、「なる」の表す、ある事態からある事態への見えの変化のプロセスが、英語では表現されず単に結果だけの記述となっているということである。これは、第2章で論じた、時に対する推移の感覚の場合と全く同じように考えられる。つまり、「臨場的スタンス」の日本語では、事象の推移としての見えの変化が体験され、このことが、時の推移をも含みこんだ、いわば、「なる」という表現となっているのに対し、〈外置的スタンス〉に立つ英語では、現場の「生きた時間」での事象の推移を体感しえないため、事象の変化を推移的な感覚としては捉えにくく、結果のみが前景化されるということになると考えられる。

この違いが、さらにはっきり表れるのが、次の(97)のような、「なる」の対応表現として、「なる」とは全く逆の使役を表す *make* が用いられる場合である。

- (97) この薬を飲めば、気分がよくなりますよ。
This medicine will you make you feel better.

(西村 1998 : 137)

(97) のような、日本語と英語の比較はよく指摘されるが、この違いは、一般的には、「[する] 的な言語—〈行為者〉」が〈変化〉を引き起こすという捉え方を好む言語—対「なる」的な言語—〈変化〉そのものを前景化する傾向のある言語」(西村 1998 : 158) の違いとされる¹⁶⁾。

以下がそのような実例である。

- (98) なんだか、じぶんが とっても ちっぽけで、みにくく おもわれて、かなしくなりました。

(『しょうぼうじどうしゃ じぶた』：19)

Jeeper started to feel that he was small and ugly and it made him sad.

(*Jeeper the Fire Engine* : 19)

- (99) 「はい。ゆうべの ゆきで ひやしてやりましたら すっかりげんきになりました」

(『ねずみのおいしゃさま』：24)

“Yes. I cooled him using some of the snow that fell last night.

It made him much better.”

(*Dr. Mouse's Mission* : 24)

いわば、自発の表現ともいえる「なる」の表す意味内容が、英語では全く逆の make のような使役形で表現されることは、非常に興味深い現象であるといえるが、この違いについても、〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の違いから捉えることは可能であると思われる。池上(2006b : 189) は、日本語の特徴として、「起因への言及を避ける」ことをあげているが、そもそも、〈臨場的スタンス〉による把握の対象は、あくまで、事象の推移に対する「変化の気づき」としての体験なのであり、その場合、把握の対象となる事象は、事象を成している個々の構成素を含みこんだ時間的存在としての事象全体なのであり、個々の構成素間の関係なのではない。なぜなら、構成素間の関係は、空間的・時間的な存在ではありえず、感覚的体験としては把握することはできないのである。一方、〈外置的スタンス〉における把握の対象は、全体としての事象ではなく、時間的存在とは無縁な、個々の構成素間の関係にあるということになる。その場合、「起因」である動作主を中心とした他動性に基づいた分析が行われることになる。

「なる」的言語と「使役」的言語の違いは、結局のところ、時や事象の推移を、体験的に捉えることのできる言語とそうでない言語の違いといえよう。次の2つの引用は、それぞれ日本語の特徴について述べたハルトマンとヘアファールトからのものであるが、どちらの見解も、〈臨場的スタンス〉による把握の表われとしての日本語という点では、共通していると思われる。

- (100) (日本語においては) 個々の過程は分析されるのではなく、ただ知覚され、確認されるだけである。この場合、出来事が何に由来するかは重要でなく、出来事はそれ自体体験されたままの内容を保つ。……日本語では、出来事は言うならば思考的操作によって侵されるというようなことはなく、そのあるがままの姿にとどめられるのである (池上 2002b : 79-80)。
- (101) 日本語は自然な成育を経てきた体験的言語であり、これに対し、印欧諸語は論理的な形成を経てきた命題的言語である (池上 2002b : 80)。

第5章 「時の流れ」の方向性に係わる日英語の語法の相違

以前から、次のような日本語と英語の空間的・時間的な方向性に関する表現の相違が指摘されてきた。

- (102) 「首位まで3打差」 “3 behind the leader” (影山 2002 : 18)
- (103) a. 「友人だったあの人たちは喧嘩別れした」
“They were friends before the argument.”
b. 「六時十分前」 “ten minutes to six”
c. 「お先にどうぞ」 “After you.” (久泉 2005 : 111-115)

このような対照的な表現について、影山（2002）や久泉（2005）は、次のように述べている。

(104) (英語は) 予定された未来の時点に立って、そこから現在を振り返る。
(影山 2002 : 18)

(105) 日本語の発想では歴史的順序で、英語の発想ではそれに逆行する方向で視点が定められている。
(久泉 2005 : 114-115)

しかし、問題はなぜそのような表現の違いが生じるのかということであるが、このことについても、〈臨場的スタンス〉の平面的な視点と、〈外置的スタンス〉による立体的な視点という観点からの説明は可能であろう。そもそも「未来の時点から現在を振り返る」ためには、〈外置的〉な立体的な視点が必要である。

次の(106)のような日英語の表現の違いも、〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の違いから説明できるように思われる。

(106) そとで おりょうり
木かげで ひるね
さかなつりや 山のぼり
くらくなるまで あそんでくらす
(『ぐりとぐらの1ねんかん』 : 17)

Cooking on an open fire,
Napping in the shade of a tree.
Let's go fishing and then hiking in the hills.
No worries, no cares, we'll play the days away,
From dawn 'til dusk.

(*Guri and Gura's Playtime Book of Seasons* : 17)

ここで注目する箇所は、「くらくらなるまで」とその英訳である“From dawn 'til dusk.”であるが、英語の“From dawn 'til dusk.”という dawn と dusk を両方取り入れた対称的な表現は、あくまで、過去の dawn と未来の dusk の両方を見渡せる立体的視点であればこそ可能な表現であるように思われる。時が一方方向にしか流れない日本語での平面的視点では、過去に言及する「朝から」「from dawn」は表現する必要もなく、そのため、「くらくらなる」「til dusk」だけが言及される非対称的な表現になっていると考えられる。

次の例にも、同じような違いが感じられよう。

(107) 豆太は、……よいの口からねてしまった。

(『モチモチの木』：73)

Mameta..... was fast asleep before dark.

(*The Tree of Courage* : 17)

ここにおいても、一方方向への時の流れの平面的な視点を表す「よいの口から」と、「未来から現在を振り返る」立体的な視点の“before dark”の対比が表れている。

最後に次の例をみてみよう。

(108) Freddie, the leaf, had grown large. His mid-section was wide and strong, and his five extensions were firm and pointed. He had first appeared in Spring as a small sprout on a rather large branch near the top of a tall tree.

(*The Fall of Freddie the Leaf*)

葉っぱのフレディは この春 大きな木の梢に近い 太い枝に
生まれました。そして夏にはもう 厚みのある りっぱな体に成

長しました。五つに分かれた葉の先は 力強くとがっています。
(『葉っぱのフレディ』)

(108)の原文では、季節の順序は、実際の時の流れにはとらわれない述べ方となっているのに対し、日本語訳では、「春」「夏」が、現実の一方方向の時の流れに沿って表現されているというはっきりした違いが表れている。さらに言えば、英語原文には、summer という語すらない。この違いについても、「臨場的に捉えて、言語化する一つまり、問題の事態の中に身を置き、体験的に語る」(池上 2006 : 197)という平面的な日本語と、時の推移には無関係な立体的な英語との違いから説明できよう。

第 6 章 〈臨場的スタンス〉と日本文化の係わり合い

「場」が日本語・日本文化に深く根をおろしていることは、これまで、様々な面で指摘されてきた。例えば、次のメイナード (2000 : 357) の引用は興味深い。

(109) ……日本語の場所性に関して、中村 (1998) が興味深い指摘をしている。日本語の基本動詞「なり」について、その意味が行為の主体でなく、場所に依存していることを指摘し、「植物の成長・増殖に起源を持つ〈なる〉の立場は、単なる生成発展ではなくて、基盤あるいは場所への依存度が大きい」(1998 : 301)と述べている。身近な例で言えば、中村 (1998) が指摘する通り、日本語では、「彼は、人々を、食事に招く」というより、「彼の、家で、一席、設ける」とか「彼の、家で、宴会が開かれる」という表現が自然であることに見て取れる通り、招く主体よりできごとの起きる〈場所〉の方を明示することが自然とされる。ここにも〈主格の非優位性〉が認められるのである。

このような例はあげればきりがない。Hinds (1986: 28) は、「このあいだ宝塚から電話があったのよ」が、“The other day my mother called.”を意味する例を紹介し、日本語では、「宝塚」という場所が“my mother”という人名の代わりに用いられるとしている。このように、場所が、日本語の表現に密接にかかわっているのは、〈臨場的スタンス〉においては、人というモノが、それだけで独立した存在としては扱われず、あくまで、場面に依存したものとして捉えられるためである¹⁷⁾。地名が小説のタイトルにしばしば用いられることにその特徴があるともいべきトラベル・ミステリーや旅情ミステリーといったミステリー小説のジャンル、あるいは、同じように、歌のタイトルに地名が用いられる「ご当地ソング」というジャンルの演歌が大衆文化に存在していること自体、日本語に培われた日本文化の場所へのこだわりと愛着を表しているともいえる。板坂 (1971: 136) も、「文学がこれほど場所と結びついているところは他に例を知らない」と述べている。

映画のタイトルについての日英語の違いを論じた尾野 (2004) には、タイトルから映画の内容が推測できる邦題に対し、タイトルからは何についての映画かわからない洋画のタイトルの事例が多数報告されている。尾野は、池上 (1999) の「行為のスキーマ」「感覚のスキーマ」という概念を軸に、邦画と洋画のタイトルの違いを論じたのであるが、そもそも「感覚のスキーマ」とは、〈臨場的スタンス〉での把握に他ならないといえる。なぜなら、場の雰囲気の感覚的把握は、場面に臨場してこそ可能であるからである。一方、「行為のスキーマ」とは、現場の時間性を捨象した〈外置的スタンス〉での把握に他ならない。他動性に基づく「行為のスキーマ」による分析であれば、現場の雰囲気よりは、場面性が捨象された事象を構成する要素の分析に焦点が置かれることになる。洋画では「行為のスキーマ」的な分析による主人公の固有名詞が、そのまま映画のタイトルに用いられることがよくあるが、人名だけでは、その映

画が、ドラマなのかサスペンスなのかロマンスなのかについての手がかかりはないということになる。

文学についていえば、古来、日本においては、自然が対象となってきたが、その中でも俳句には、「季語」というものがあり、季節の移り変わりにはもっとも敏感な文学形式である。加藤(2007:65)は、「恋とならんで同じ程度に四季の移りゆきを重んじるのは、日本の文化において際立った傾向である」とすら述べている。このことにも、時の推移を敏感に感じとれる〈臨場的スタンス〉が少なからず関わっていると思われる。さらに、余韻・余剰という「含蓄」の価値(芳賀2004:148)に対する感覚の鋭さも、〈臨場性〉をもってのみ可能となりえよう。一方、俳句と対極に位置すると思われる叙事詩や大長篇小説が生まれにくかった理由としては、大長編を語るのに必要と思われる対象を客観化しうる〈外置的スタンス〉的な視点が存在しないという日本語そのものの特質が関わっていたことも十分に考えられるのではないだろうか。逆に、日本の近代文学において「私小説」といわれるジャンルが発達したことは、日本語の特質ともいえるべき〈臨場的スタンス〉のもつ体験性と全く無関係であるとは言い切れない側面があるようにも思われる。少なくとも、「私」の内面を語るのに、日本語はふさわしい言語であるはずである。

池上(2002a:85-87)は、西洋庭園は、固定された視点から全体の展望を楽しめる造りになっているのに対し、日本の〈回遊式庭園〉は、次々に変化していく見えを楽しむ造りになっていると指摘しているが、ここでの「固定視点」と「移動視点」の違いは、〈外置的スタンス〉と〈臨場的スタンス〉の違いそのものであることはいうまでもない¹⁸⁾。この違いは、また、定まった視点のある遠近法で書かれた西洋画と、定まった視点をもたない、ほとんど奥行きが感じられない平板的な大和絵(熊倉1990:15)の違いにも通じるものである¹⁹⁾。

加藤(2007)は、日本建築について、「日本の建築的空間の特徴の一つ

は、強い水平線志向であり、高さを強調する建物は少ない」(2007:188)とし、さらに、「高さを志向せず、垂直の線に沿って広がらない日本の町や住居は、水平に、自然発生的に広がる」(2007:191)とも述べている。少なくとも、日本の建築の水平性と、西洋の建築の垂直性が、第4章で論じた日本語と英語の平面性と立体性の違いに平行していることは、興味深い現象であると言わねばならない²⁰⁾。

荒木(1973)は、日本人の行動様式を「集団論理的」及び「他律的」としているが、これは、要するに、行動の基準を外部に求めるということであり、このことは、周囲の雰囲気には敏感であるということにもつながる。また、池上(1984:235)にも、「日本人の社会的な行動様式を見てみると、「個人」が常に自らを取りまく「周囲」(あるいは「全体」)に同調する形で行動するという傾向が顕著である」との記述がある。私見では、このような傾向と〈臨場的スタンス〉とは、少なからず係わり合いがあるようにも思われる。つまり、〈臨場的スタンス〉の言語の国民であれば〈外置的スタンス〉の言語の国民よりも、周りの雰囲気により敏感になることは否定できないようにも思われる²¹⁾。社会の雰囲気とは、山本(1983)のいう「空気」と考えられるかもしれない。

また、この一方で、牧野は、「未練」は日本人が好きな行動様式(牧野1978:17-18)であるとしているが、「未練」も、〈臨場性〉による場へのこだわりによるものといえよう。一見したところ、「他律」と「未練」は相容れない概念のようにも思えるが、「他律」が、取るべき行動の指針を周りの「流れ」に求めることであるのに対し、「未練」は、すでに存在している愛着ある雰囲気から離れたいことを表し、どちらの場合にせよ、認知主体が現場に臨場するがゆえの感受性の敏感さという点では共通していると思われる。もっとも、このことについては更なる考察が必要であろう。

ドナルド・キーン(1979:73)は、『徒然草』の一節にふれて、次のよ

うに述べている。

(110) 「さだめなきこそ、いみじけれ」という美意識を、人は日本以外のどこに求めうるだろうか。それは、西欧文化の底を流れる古代ギリシアの思想を、真っ向から否定したもの、そして真に日本的なるもの、である。

「ものは、定めがないからこそ美しい。桜花は、散るからこそ美しい。」(キーン 1979: 74) とする感覚は、〈臨場的スタンス〉による時の推移を体感できる感覚がなければ、生じ得なかった美意識であるといってもよいであろう。

第7章 むすびにかえて

本稿では、まず、研究対象としての例文を絵本に限定したが、この試みに一応の成果はあったといえるかもしれない。少なくとも、4.7節で論じた「紙芝居的手法」は、一般の小説にはそもそもありえない用法であるし、また、4.2節で論じた「S2の内容の先取りを表す」butの用法も、絵本において、その特徴がはっきりと表れていたように思われる。ともかく、絵本で用いられる日本語には、日本語のより根源的な用法が表れているということ是可以できるように思われる。

本稿では、日本語の特徴的な表現ともいうべき、「なる」や「やがて」の推移表現を〈臨場的〉な体験へのこだわりという観点から論じたが、同時に、これらの表現の体験的なニュアンスは、〈外置的スタンス〉の英語では訳出しにくいことをみてきた。また、これらの推移表現は、絵本においてもよく用いられる表現であることはつけ加えておきたい。

牧野(1980: 238)は、日本人のカメラ好きの理由の一つとして、「未練という過去と共感する心理」をあげているが、そもそも「共感」とは、

「体験」の共有に他ならない。メイナード (2000 : 309) は、日本語のディスコースの特徴として、英語の「ロゴスのレトリック」に対し、「パトスのレトリック」を提唱しているが、このレトリックの特徴の一つに、「共感を目的とする」ことをあげている。とすれば、第2章で論じた「なる」や「やがて」といった「時」の推移表現のみならず、第4章で論じた「事象」の推移表現も、「体験的共感表現」の一種として、「パトスのレトリック」の中に位置づけられることは可能であるように思われる。本稿で論じた「S1 するト、S2」構文が、なぜ、日本語でよく用いられるのかといえば、それが、現場の臨場的体験を表し、よって、より共感しやすい構文になっているからと説明できるようにも思われる。そもそも、先の(101)で引用したように、日本語が「自然な成育を経てきた体験的言語である」とすれば、日本語そのものが「共感」的特徴を多く兼ね備えていることは、当然予想されることである。「体験」と「共感」の表れとしての日本語表現については、今後、さらなる考察が求められよう。

大野 (1974 : 188) は、「とき」は、「トケ (溶け)」からきたのではないかという説をとえ、「われわれの祖先は、ものがゆるみ流動してゆくこととして「時」を直感したのではないであろうか」と述べているが、この感覚は、〈臨場的スタンス〉による「時は流れる」の感覚とも一致すると思われる。鳥瞰的な〈外置的スタンス〉においては、「溶ける」現象を体感することは不可能であろう。また、〈臨場的スタンス〉で述べることは、記号表現と記号内容の間に「類像性」の関係が生じやすくなっていることも確認したが、〈臨場的スタンス〉そのものが、日本語という言語の「原点的な特徴の痕跡をまだ比較的多くとどめている」(池上 2000 : 306) ことの源になっていると言い切ることは十分可能であるように思われる。

第6章では〈臨場的スタンス〉と日本文化の係わり合いについてふれたが、ことばと文化に密接なつながりがあるとすれば、日本文化に、日

本語の〈臨場的スタンス〉的な特徴が表れるのは当然ともいえ、いくつかのそのような側面についてもふれてみた。もっとも、この点については、本稿ではあくまで覚書的に述べられたものであり、本格的に論じるとすれば、新たな論考が必要とされることになるだろう。

* 本稿の内容は、日本語用論学会第10回(2007年度)大会(12月8日 於 関西外国語大学)において、「〈臨場的スタンス〉がとる推移的表現について：英訳との対比を通して」というタイトルでの口頭発表に基づいたものであることをお断わりしておきたい。発表の際は、池上嘉彦先生から貴重なコメントをいただくことができた。草稿の段階では、北海道教育大学函館分校上山恭男氏、札幌大学濱田英人氏から多くの示唆を頂いた。記して感謝の意を表したい。

なお、本稿を記すにおいて、得るところの多かった中島(2001)の論文は、本学の向井亮教授からいただいたものである。この場を借りてお礼を申し上げたい。この知的好奇心を刺激する論文をどこかでなんとか役立てたいとは思ったものの、当初は、どのテーマで利用できるのか見当すらつかなかった。この論文を利用できる目処がたち、ようやく本稿が成ったこの3月、向井先生は武蔵を去られる。かろうじて間にあったのであるが、これは、「する」よりは「なる」の世界というべきものかもしれない。

また、インターネット検索の仕方については、本学の佐々木勝志教授の懇切丁寧な指導をいただいている。記して感謝の意を表したい。

注

- 1) このことの最初の指摘は寺村(1976)であると思われるが、すでに次のような記述がある。

表現的には、英語は「スル」(その逆方向としての「サセル」)という表現を好むのに対し、日本語は、できるかぎり「ナル」表現をと

ることを好む性質をもっている、ということである。前者は事象の「原因」に常に関心を持ち、後者は「結果」「現在の事態そのもの」に関心を持つ表現だ、というようにも言えるだろう（寺村 1976：67-68）。

- 2) この指摘についても多くの文献があるが、その一つとして吉川（1995：210-212）をあげておきたい。
- 3) 池上（2006a：24）は、「日本語話者の〈好まれる言い回し〉としての〈省略〉の原点は〈主観的把握〉への強い傾斜である—こういう認識なしに、日本語のいわゆる〈省略〉の本質を論じることは、今後は無意味になるう」（下線部筆者）と述べている。
- 4) 〈外置的スタンス〉は筆者の造語である。また、〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉は、それぞれ、“on stage”, “off stage” の概念にも相当すると思われる。
- 5) 絵本には、ページが記載されているものとそうでないものがあるが、ページ数が書かれているものについては、引用例文にページ数を明記しておいた。
- 6) この絵本の冒頭は、次のようになっている。

(i) きょうは いいてんき。

ぞうくんは ごきげん。

(『ぞうくんのさんぽ』)

It is a beautiful day and

Elephee the elephant is feeling happy. (*Elephee's Walk* : 2)

つまり、「きょう」は today とは、訳出されていないのである。ちなみに、本文の(2)の引用は、この絵本の末尾の個所である。

なぜ、冒頭の「きょう」は today と訳出されず、末尾の「きょう」が today と訳出されているのかは、興味深い問題であるといえるが、「冒頭」と「末尾」の違いに、ひょっとしてその違いを引き起こしている手掛かりがあるのかもしれない。つまり、「冒頭」では、「語り手」の〈外置的スタンス〉との立場が出、そのため、today は用いられにくい。ところが、「末尾」では、語り手がコンテキストの中に溶け込んでおり、〈臨場的ス

タンス)的になり、よって、today が用いられやすくなっているとする説明も可能かもしれない。

また、英語での物語がすべて過去形で書かれるわけではない。ちなみに、本文中の例文(5)は、現在時制である。

- 7) 中島(2001:116)は、「最初の出発点とした認知主体における認知状況の継起とは、言い換えれば、その認知主体にとっての生きること(life)であり、時間は絶対時間のようなものとして最初から与えられているのではなく、そうした生きることから生まれるものである」と述べている。坪本(1998:119)も、「アインシュタインが証明したように、時間はそれだけで独立して存在するものではなく、物体が空間を移動する距離を測る物差しである」と述べている。さらに中島(2001:108)には、「上で見た日本語の「と」や英語の when(これは、本稿での例文(43)のような「認知の継起」を表している場合の when である。一筆者注)の用法は、言語化された我々の体験の中には、連続した変化を言語によって独立した事象として分節化し、それら一つずつ継起的に認知していく過程があることを示している。つまり、これは世界を鳥瞰的に一挙に見渡すのではなく、一つの視点からその一部分を順に一つずつ知覚していく過程である。本稿では、こうした過程が時間概念の生まれる一番もとなる体験であるとする」との記述もある。

また、熊倉(1990:39)は、「日本語は、話し手の内部に生起するイメージを、次々に繋げていく。そういうイメージは、それが現実のイメージであれ、想像の世界のものであれ、話し手の内部では常に発話の時点で実在感をもっている。話し手が過去の体験を語る時も、このイメージは話し手の内部では発話の時点で蘇っている。その「具体性」は、空間的には「即物的」だし、時間的には「即時的」なのだ」と述べ、日本語の構文の特徴を「現実の追求」としている。

- 8) 「なる」に対応する表現として when が用いられた次のような例もある。
- (i) そして、ひつじかいたちは、ゆうがたになると、より集まって、そのうつくしい音に、耳をすまし、一日のつかれをわすれるので

した。 (『スーホの白い馬』)

And so, to this day, when dusk falls over the vast grasslands, the shepherds gather together to listen to the low and gentle sounds of the horse-head fiddle. (Suho's *White Horse* : 47)

しかし、もちろん、この英訳にも「推移」の感覚は表されていない。

- 9) この「きょう」も、英語には訳出されていない例である。
- 10) もちろん、「やがて」にも、「すぐに」(soon) や、「結局」(eventually) の意味はある。しかし、このような意味の場合においても、「やがて」に共通しているのは、語りの現場における、「生きた時の流れ」である。

また、熊倉(1990:20)には、「さっき店で買ってきたケーキ」という表現について、「……実は、「さっき」という言葉にしてからが、辞書の定義づける、たとえば英語の〈a few minutes ago〉という、客観的な時間を指示するのではなく、話し手の経験した時間としての「さっき」なのだ」(下線部筆者)との指摘がある。

- 11) 「時」が「流れる」のは、〈臨場的スタンス〉での地を這うような感覚にはふさわしいが、一方、視点が地にない〈外置的スタンス〉においては、「時」は、空中を「飛ぶ」感覚がふさわしいかもしれない。ちなみに、『新編英和活用大辞典』研究社(1995)にも、“time flies”の例はのっているが、“time flows”の例はのっていない。

参考までに、Google 検索の結果は次の通りである。(2007年12月25日のサーチによる)。

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| (i) 時は流れる (フレーズを含む) | 49,100 件 (日本語、日本) |
| 時は飛ぶ (フレーズを含む) | 566 件 |
| (ii) time flows (フレーズを含む) | 66,700 件 (英語、アメリカ) |
| time flies (フレーズを含む) | 3,340,000 件 |

とはいえ、もちろん、これは、あくまで、一般的な傾向にすぎず、反例をさがすのは容易である。まずは、「時は飛ぶ」例である。

- (iii) 月日は、とぶように過ぎていきました。 (『スーホの白い馬』)

The years flew by. (Suho's *White Horse* : 12)

この話の舞台であるモンゴルの大草原においては、「時」は「流れる」よりは「飛ぶ」ほうがふさわしいといえるかもしれない。ただ、ここでも、「飛ぶ」ではなく、「飛ぶように」という表現になっていることに注意すべきである。

一方、次は、英語原文における“time flows”の例である。

(iv) ... where the legal drinking is 18 and the good times flow as readily as the alcohol.

(『Spring Madness』3/19/02『ABC World NEWS 5』p.82, 金星堂)

しかし、ここでは、“as the alcohol”という語があることに注目すべきであろう。

「時の流れ」に関連してつけ加えるならば、ベルク(1994:198)にも、「当時の日本人は人生を、絶えず移り行く水の流れと考えていた。……すでに『方丈記』で鴨長明が、人の命を、現れては消え、どこから来たともどこへ行くとも知れない、川の水にたとえている。人生とは、二つの無限の間のつかの間の一瞬でしかない。……」との記述がある。

- 12) 本稿では、ル形は発話時でない現場の指示基準を表すとするが、この考え方は「指示基準の移動」(牛江1995:493)の考え方に従う。

また、本稿で扱う「と」は、あくまで、(i)のような「時間」を表す「と」であって、次の(ii)のような「ダロウ」が生じる譲歩の関係を表す場合は扱わない。

(i) 蛇口をひねる(*だろう)と水が出た。

(ii) 2人の関係がどうだろうとぼくには関係ない。(坪本1998:132)
また、日本語においては、「と」が「とき」になると、空間の共有が保証されなくなる。

(iii) a. 花子が玄関に行くとき、(応接間に)小包があった。(小包は玄関になくてもよくなる。)

b. *花子が玄関に行くと、応接間に小包があった。

(坪本1998:122)

このことについて坪本は、「と」が線的な関係で接続されるのに対して、「とき」は、2つの節の内容を点的な関係で客観的に結びつける」としている。

また、中島(2001:106-107)も、(iva)と(ivb)の違いについて、

(iv) a. 部屋にいると、外で車の止まる音がした。

b. 部屋にいたあと、外で車の止まる音がした。

(iva)では、S1とS2の時間は、同時に重なりあっているが、(ivb)ではS1の終了したあと、S2の事象が生じたという、全く別の関係を表すことになる」と述べている。

つまり、「と」と「とき」は同じではないのであり、whenは、「と」ではなく、「とき」に相当するものである。ということは、次のKuno(1993)での、(va)を(vb)とするパラフレーズは正確なものではないということになる(このことについては、本稿の4.1.2節も参照のこと)。

(v) a. 学校に行くと、メアリーが来ていた。

b. When I got to school, Mary had already been there.

(Kuno 1973:184)

また、中島(2001:109)は、次の文の(via)(vib)が成立しているも、(vic)は成立しないとしている。

(vi) a. 健三が行く手を何気なく眺めると、思いがけない人が彼の視野に入った。

b. 思いがけない人が彼の視野に入ると、思わず彼の眼をわきへそれせた。

c. 健三が行く手を何気なく眺めると、思わず彼の眼をわきへそれさせた。

中島は、この理由を「これは、認知主体が事象を観察する際、観察できるのは、一度に一つの事象だけで、同時に二つないしそれ以上の事象を観察することはない」ためとしているが、「一度に一つの事象だけ」とは、認知主体が、連続する場面を継起的に認知できるのは、2つの場面までと解釈することも可能であろう。

例えば、次の例をみてみよう。

(vii) a. みいちゃんは、てのなかで あったかくなった おかねを
わたして、ぎゅうにゅうを うけとると、ぱっと かけだ
しました。 (『はじめてのおつかい』：26)

b. Miki handed the storekeeper her two warm coins, took
the milk and started to run home.

(*Miki's First Errand* : 26)

日本語の (vii) は、「S1 するト、S2」の2つの連続する場面を述べた構文であるのに対して、英語は、過去の3つの出来事を並列して述べた構文であるが、3つの動作を連続して述べることができるのは「外置的スタンス」であればこそ可能なのであり、「臨場のスタンス」では、「S1 するト、S2 するト、S3」の3つの動作の「継起的な認知」は、次のように不可能である。

(viii) *みいちゃんは、てのなかで あったかくなった おかねを
わたすと、ぎゅうにゅうを うけとると、ぱっと かけだ
しました。

ここには、3つ以上の場面を連続して観察することはできないという、認知の原理が反映されていると思われる。

- 13) 日本語の例文では、「そらいろのいえは、それでも、おおきく おおきく なっていき、」と、「紙芝居的手法」で、文は17ページの中で終わっているが、英語版では、“And the sky blue house still kept on growing larger and larger.”と文は完結している。
- 14) 直接的には、この節の内容には関係するものではないが、この例文での「なきなき走った」の「なきなき」という、同じ語の繰り返しにも注目したい。本文中の例文(72)でも、「ジムと オーリーと アーチボールドは かけて かけて くたびれて、もう これいじょうは かけられなくなりました」と、「かける」が3回繰り返されている。(例文(70)も参照されたい。)

次もくりかえしの例である。

- (i) ウーフは にげて にげて にげました。

Oofu fled as fast as he could.

(『ゆでたまごまーだ/*Waiting for a Boiled Egg*』: 34)

確かに、牧野 (1980) の指摘を待つまでもなく、日本語の特徴として「くりかえし」があげられることはいうまでもないが、このような繰り返しの特徴も、時の推移に沿った「体験的」かつ「平面的」な〈臨場のスタンス〉の特質として捉えることは可能であると思われる。

- 15) もちろん、次の (i) のように日本語原文の「紙芝居的手法」に、英語版でも従っている例もある。

- (i) どうしたら よいだろう? と だるまちゃんも かみなりちゃんも かんがえました。かんがえ かんがえ かんがえて いるうち— (『だるまちゃんとかみなりちゃん』: 11)

Little Daruma and Little Kaminari cross their arms and begin to think and think and think some more, until suddenly...

(*Little Daruma and Little Kaminari* : 13)

また、英語原文においても、「紙芝居的手法」が用いられている例もある。

- (ii) The boat tipped... (*Mr Gumpy's Outing*)

ふねが ひっくりかえって…… (『ガンピーさんのふなあそび』)

ただ、英語原文でのこのような「紙芝居的手法」は、少ないというべきであろう。

- 16) この「なる」と「させる」の違いは、日本語と英語の根源的な違いにかかわるテーマであると思われるが、松井 (1999 : 133) が述べる次のような違いも、この問題にかかわっているように思われる。

日本語の世界では、物事が「自然に」発生したり「自然に」消滅したりします。it の項で見たように、日本語においては、雨が降ったり暗くなったりするのは「自然に」そうなるのであって、日本語には人智を超えてさまざまに変動する世界が最初から前提として与えられています。それに対して英語の世界はゼロからスタートする静止した世界です。そこに何かを発生させたり消滅させたりするのは、

常に「主語」の能動性なのです。英語においては、「自然」そのものさえもが人的な行為の対象ですから、世界に生じる動きには必ず原因があり、その原因こそが主語なのです。逆に言うと、英語における主語というのは、世界に動きを与えることができる唯一の形態です。

一方、吉村(2006:20)には、「英語は行為者を際立たせる表現になっているのに対して、日本語は行為者を目立たないようにする傾向がある。この日本語の特性は、謙遜の美德を重んじる日本文化を反映している顕著な特性である」との記述がある。確かに、そのような見解も可能ではあると思われるが、「行為者を際立たせる表現」か否かは、事態を推移的に捉える言語とそうでない言語の違いの表れと捉えることも十分に可能であろう。ちなみに、2006年出版のこの論文には、日英語比較に関する多くの参考文献があげられているが、奇妙なことに、池上の文献は一冊もあげられていない。

17) 場所が日本語表現の基本であることもよく指摘されることである(Ikegami 1991:299-300)。

- (i) a. 部屋には窓が二つある。
b. The room has two windows.
- (ii) a. ジョンには子供が2人いる。
b. John has two children.

このことから、日本語では、存在構文が所有を表すのに用いられ、英語では、所有構文が存在を表すのに用いられるということになる。

18) ベルク(1994:200)にも、以下のような記述がある。

造園術(特に廻遊式庭園の場合)にも同じ原理が見られる。ここでも重要なのは、概括的展望、一つにまとまった静的視野の回避である。庭の作りは運動を想定しているのだ。散策者は自ずと、不連続に継起する視界に精神を集中し、その各々をそれ自体として鑑賞せざるをえない。肝要なのは風景の変化、交互に見え隠れする景色である。……

- 19) さらに熊倉（1990：56）は、物語と絵巻物の関連を、次のように述べている。

常に語りの現在を物語の場としてもつ日本の物語形式は、視覚的に絵巻物の形式に似ている。……絵巻の視点は現在時点の連続だから、視点そのものが画面を常に移動することになり、画面のイメージは鑑賞するものにとって現在化される。遠近法によらないから、イメージは平板になり、西欧の作品がもつ歴史性を捉え得ない。その反面、現実把握は焦点が常に現在に合っていることから、西欧の人たちより鋭敏だろう。

ここで述べられている、「絵巻の視点」は、本稿で論じた「S1 するト、S2」の視点にも当てはまると考えられる。

- 20) 牧野（1978：94）には、Carver（1955：14）*Form and Space of Japanese Architecture*（Shokokusya）からの次のような興味深い引用が紹介されている。

日本の建築のなしとげたユニークな貢献は非相称的な秩序の体系を発展させたことである。……非相称性は経験に参加することを要求し、そこにユニークな活力を生む。暗示によって、精神に不完全なものを完成させる。空間における関係がたえず変わって行く。非相称性は外から与えられた完結体ではなく生の躍動の延長として存在する。生は静的でもなく、完成体でもなく、結論でもない。その本質は、成長、変化、関係にある。

また、加藤のいう建築物の水平性と垂直性に関連してつけ加えれば、池上（2000：229）は、日本語の「トコロ」が、英語では「モノ」として定義されていることがよくあるとして、次のような例をあげている。

競技場＝「競技を行う場所」

STADIUM＝“a building for sports, consisting of a field surrounded by rows of seats”

日本語では、「競技場」は「場所」と〈平面的〉に捉えられているのに、英語では、“STADIUM”は“building”と〈立体的〉に捉えられている。池

上は、さらに、日本語では、〈機能〉との関連での特徴づけがなされているのに対し、英語では、対象そのものの〈構造〉が問題にされているとしている。

- 21) まわりに左右されるとは、「流れ」に敏感であるということでもあるが、このことは、日本における学問の世界においてもあてはまるかもしれない。筆者の専門分野である英語学についていえば、戦後、日本の英語学は、構造言語学から、変形生成文法、機能的構文論を経て、今や認知言語学の全盛といった大きな「流れ」がある。確かに、このような流れ自体は学問の進歩の結果ともいえるものではある。しかし、海外においては、日本におけるような、これほどのはっきりした区分けはないような印象も受ける。また、今や、日本中の大学に吹き荒れている「大学改革」「教育改革」においても、「流れ」に飛びつくという傾向が全くないわけではないような印象を受けるのは、筆者だけであろうか。

参考文献

- 荒木博之. 1973. 『日本人の行動様式』 講談社現代新書.
池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
池上嘉彦. 1984. 『記号論への招待』 岩波新書.
Ikegami, Y. 1991. “‘DO-language’ and ‘BECOME-language’: Two Contrasting Types of Linguistic Representation.” In Ikegami, Y. (ed.), *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*. 285-326, John Benjamins.
池上嘉彦. 1999. 「日本語らしさの中の〈主観性〉」『言語』 1月号, 84-94.
池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』 講談社.
池上嘉彦. 2002a. 『自然と文化の記号論』 放送大学教育振興会.
池上嘉彦. 2002b. 「〈モノ〉と〈コト〉、そして〈トコロ〉—日本語における〈主観性〉をめぐって」『言語』 12月号, 72-83.
池上嘉彦. 2004. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)」『認知言語学論考 No.3 2003』 1-49, ひつじ書房.

- 池上嘉彦. 2005. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)」『認知言語学論考 No.4 2004』1-60, ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2006 a. 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉」『言語』5月号, 20-27.
- 池上嘉彦. 2006b. 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会.
- 板坂 元. 1971. 『日本人の論理構造』講談社現代新書.
- 牛江ゆき子. 1995. 「テキストにおける時制の指示基準の移動について」『長谷川欣佑教授還暦記念論文集』491-504, 研究社.
- 大野 晋. 1974. 『日本語をさかのぼる』岩波新書.
- 小澤伊久美. 2006. 「川端康成『雪国』に見られる話者の時間意識—原文と英訳との比較から—」『日本認知言語学会論文集』第6巻, 581-584.
- 尾野治彦. 2004. 「日英語の映画のタイトルにおける表現の違いをめぐって—「感覚のスキーマ」と「行為のスキーマ」の観点から—」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第36号, 63-110.
- 影山太郎. 2002. 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- 加藤周一. 2007. 『日本文化における時間と空間』岩波書店.
- 金谷武洋. 2004. 『英語にも主語はなかった』講談社選書メチエ.
- キーン, D. 1979. 『日本文学のなかへ』文藝春秋.
- 熊倉千之. 1990. 『日本人の表現力と個性』中公新書.
- Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. The MIT Press.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房.
- 坪本篤朗. 1998. 「文連結の形と意味と語用論」『モダリティと発話行為(日英語比較選書3)』100-202, 研究社.
- 寺村秀夫. 1976. 「「ナル」表現と「スル」表現—日英「態」表現の比較—」国立国語研究所『国語シリーズ別冊4 日本語と日本語教育—文字・表現編—』49-68.
- 中島信夫. 2001. 「具象概念から抽象概念のメタファー的構成」『私学研修』第157・158号, 105-118.
- 中村雄二郎. 1998. 『日本文化における悪と罪』新潮社.

- 中村芳久. 2004. 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論II (シリーズ認知言語学入門第5巻)』3-51, 大修館書店.
- 西村義樹. 1998. 「行為者と使役構文」『構文と事象構造(日英語比較選書5)』108-203, 研究社.
- Hinds, J. 1986. 『*Situation vs. Person Focus*/日本語らしさと英語らしさ』くろしお出版.
- 芳賀 綏. 2004. 『日本人らしさの構造』大修館書店.
- 早瀬尚子. 2007. 「英語懸垂分詞における「主観的」視点」『ことばと視点(阪大英文学会叢書4)』77-90, 英宝社.
- 久泉鶴雄. 2005. 「日英語の視点の相違と表現の相違一点描一」日英言語文化研究会(編)『日英語の比較 発想・背景・文化』111-117, 三修社.
- ベルク, A. 1994. 『空間の日本文化』(宮原信(訳))ちくま学芸文庫.
- 本多 啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 巻下吉夫. 1979. 「WHEN とその逆転性について」『英語と日本語と(林栄一教授還暦記念論文集)』323-343, くろしお出版.
- 巻下吉夫. 1997. 「翻訳にみる発想と論理」『文化と発想とレトリック(日英語比較選書1)』2-91, 研究社.
- 牧野成一. 1978. 『ことばと空間』東海大学出版会.
- 牧野成一. 1980. 『くりかえしの文法』大修館書店.
- 松井力也. 1999. 『「英文法」を疑う』講談社現代新書.
- メイナード, 泉子・K. 2000. 『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—』くろしお出版.
- 森田良行. 1998. 『日本人の発想、日本語の表現』中公新書.
- 安井 稔. 1997. 「日本語の語感と英語の語感」『英語学の門をくぐって』21-29, 開拓社.
- 柳父 章. 1979. 『比較日本語論』ハベル・プレス.
- 山本七平. 1983. 『「空気」の研究』文春文庫.
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較 動詞の文法』くろしお出版.
- 吉村耕治. 2006. 「状況中心の表現と行為者中心の表現—日英語の根本的相違

を探る一」『表現研究』第84号, 17-26.

資料

日本語原文のもの

- 大塚勇三 (作)・丸木 俊 (絵). 1964. 『うみのがくたい』福音館書店.
The Ocean-Going Orchestra. Sarah Ann Nishié (tr.). 2006. ラボ教育センター.
- 大塚勇三 (再話)・赤羽末吉 (絵). 1967. 『スーホの白い馬』福音館書店.
Suho's White Horse. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 加古里子. 1968. 『だるまちゃんとかみなりちゃん』福音館書店.
Little Daruma and Little Kaminari. Peter Howlett・Richard McNamara(tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- 加古里子. 1973. 『からすのパンやさん』偕成社.
Mr. Crow's Bakery. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2007. アールアイシー出版.
- 神沢利子 (作)・井上洋介 (絵). 2007. 『ゆでたまごまだ/Waiting for a Boiled Egg』Kate Klippensteen (tr.). ポプラ社.
- 斎藤隆介 (作)・滝平二郎 (絵). 1995. 『モチモチの木』岩崎書店.
The Tree of Courage. Sako Laughlin (tr.). 2007. アールアイシー出版.
- さとうわきこ. 1978. 『せんたくかあちゃん』福音館書店.
Sudsy Mom's Washing Spree. Sako Laughlin (tr.). 2005. アールアイシー出版.
- さとうわきこ. 1981. 『いそがしいよる』福音館書店.
Grandma Baba's Busy Night!. Richard Carpenter (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- さとうわきこ. 1998. 『ことりのうち』福音館書店.
Grandma Baba's Bird's Nest!. Richard Carpenter (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.

- さとうわきこ. 1995. 『あひるのたまご』 福音館書店.
Grandma Baba's Birthday Party!. Richard Carpenter (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- せなけいこ. 2007. 『おぼけのてんぷら/*Ghost Tempura*』 Kate Klippensteen (tr.). ポプラ社.
- 筒井頼子 (作)・林 明子 (絵). 1977. 『はじめてのおつかい』 福音館書店.
Miki's First Errand. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2003. アールアイシー出版.
- 筒井頼子 (作)・林 明子 (絵). 1986. 『とん ことり』 福音館書店.
Gifts from a Mailbox. Jaylene Mory・Susan Howlett (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 筒井頼子 (作)・林 明子 (絵). 1983. 『いもうとのにゅういん』 福音館書店.
Naomi's Special Gift. Jaylene Mory・Susan Howlett (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 中川正文 (作)・山脇百合子 (絵). 1974. 『ねずみのおいしゃさま』 福音館書店.
Dr. Mouse's Mission. Mia Lynn Perry (tr.). 2007. アールアイシー出版.
- 中川李枝子 (作)・大村百合子 (絵). 1967. 『そらいろのたね』 福音館書店.
The Sky Blue Seed. Sarah Ann Nishié (tr.). 2004. ラボ教育センター.
- 中川李枝子・山脇百合子. 1966. 『ぐりとぐらのおきゃくさま』 福音館書店.
Guri and Gura's Surprise Visitor. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2005. チャールズ・イー・タトル出版.
- 中川李枝子・山脇百合子. 1992. 『ぐりとぐらとくるりくら』 福音館書店.
Guri and Gura's Magical Friend. Peter Howlett・Richard McNamara (tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.
- 中川李枝子・山脇百合子. 2002. 『ぐりとぐらのおおそうじ』 福音館書店.
Guri and Gura's Spring Cleaning. Richard Carpenter (tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.
- 中川李枝子・山脇百合子. 1997. 『ぐりとぐらの1ねんかん』 福音館書店.

- Guri and Gura's Playtime Book of Seasons*. Peter Howlett · Richard McNamara (tr.). 2003. チャールズ・イー・タトル出版.
- なかのひろたか. 1968. 『ぞうくんのさんぽ』福音館書店.
- Elephee's Walk*. Peter Howlett · Richard McNamara (tr.). 2003. アールアイシー出版.
- なかやみわ. 1999. 『そらまめくんのベッド』福音館書店.
- Big Beanie's Bed*. Mia Lynn Perry (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- なかやみわ. 1999. 『そらまめくんとめだかのこ』福音館書店.
- Big Beanie and the Lost Fish*. Mia Lynn Perry (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 新美南吉 (作) · 黒井けん (絵). 1988. 『手ぶくろを買いに』偕成社.
- Buying Mittens*. Judith Carol Huffman (tr.). 1999. University of Hawai'i Press.
- 西内ミナミ (作) · 堀内誠一 (絵). 1966. 『ぐるんぱのようちえん』福音館書店.
- Groompa's Kindergarten*. Peter Howlett · Richard McNamara (tr.). 2003. アールアイシー出版.
- 林 明子. 1989. 『こんとあき』福音館書店.
- Amy and Ken Visit Grandma*. Peter Howlett · Richard McNamara (tr.). 2003. アールアイシー出版.
- 間瀬なおかた. 2003. 『あめの ひの えんそく』ひさかたチャイルド.
- The Rainy Trip Surprise*. Mia Lynn Perry (tr.). 2006. アールアイシー出版.
- 松岡享子 (作) · 林 明子 (絵). 1982. 『おふろだいすき』福音館書店.
- I Love to Take a Bath*. Mia Lynn Perry (tr.). 2004. アールアイシー出版.
- 松岡享子 (作) · 加古里子 (絵). 1970. 『とこちゃんはどこ』福音館書店.
- Where is Little Toko?*. Mia Lynn Perry (tr.). 2004. アールアイシー出版.

間所ひさこ (作)・黒井 健 (絵). 1986. 『ころわんは おにいちゃん』 ひさかたチャイルド.

Barney and the Kitten. Peter Howlett (tr.). 2006. アールアイシー出版.
間所ひさこ (作)・黒井 健 (絵). 1986. 『ゆきのひのころわん』 ひさかたチャイルド.

Barney's First Snow. Peter Howlett (tr.). 2006. アールアイシー出版.
渡辺茂男 (作)・山本忠敬 (絵). 1966. 『しょうぼうじどうしゃ じぶた』 福音館書店.

Jeeper the Fire Engine. Jaylene Mory・Susan Howlett (tr.). 2004. アールアイシー出版.

英語原文のもの

Beskow, E. 1982. *Olle's Ski Trip* (English Translation by Forssell. K) ラボ教育センター.

『ウツレと冬の森』 おのでらゆりこ (訳). 1981. らくだ出版.

Brian, J. (text) & King, S. M. (illustration). 2001. *Where does Thursday Go?* Clarion Books.

『もくようびは どこへ いくの?』 すえよしあきこ (訳). 2005. 主婦の友社.

Burningham, J. 1998. *Mr Gumpy's Outing*. ラボ教育センター.

『ガンピーさんの ふなあそび』 みつよしなつや (訳). 1976. ほるぷ出版.

Burton, V. L. 1942. *The Little House*. Houghton Mifflin Company.

『ちいさいおうち』 いしいももこ (訳). 1965. 岩波書店.

Burton, V. L. 1999. *Choo Choo*. ラボ教育センター.

『いたざらきかんしゃ ちゅうちゅう』 むらおかはなこ (訳). 1961. 福音館書店.

Buscaglia, L. 1982. *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.

『葉っぱのフレディ』 みらいなな (訳). 1998. 童話屋.

Carle, E. 2006. 『*The Very Hungry Caterpillar*/はらぺこあおむし』 もりひ

- さし (訳). 偕成社.
- Keller, H. 1989. *The Best Present*. Greenwillow Books.
『いちばんすてきなプレゼント』あかぎかんこ・あかぎかずまさ (訳).
2001. ポプラ社.
- Keller, H. 1991. *Horace*. Greenwillow Books.
『ママとパパを さがしにいくの』すえよしあきこ (訳). 2000. BL 出版.
- Keller, H. 2002. *Farfallina & Marcel*. Greenwillow Books.
『ファルファリーナとマルセル』河野一郎 (訳). 2006. 岩波書店.
- Lobel, A. 1971. *Frog and Toad Together*. Harper Trophy.
『ふたりはいっしょ』三木 卓 (訳). 1972. 文化出版局.
- Lobel, A. 1979. *Days with Frog and Toad*. Harper Trophy.
『ふたりはきょうも』三木 卓 (訳). 1980. 文化出版局.
- Lucas, D. 2006. *Whale*. Alfred A. Knopf.
『くじらのうた』なかがわちひろ (訳). 2007. 偕成社.
- Rey, H. A. 1947. *Curious George Takes a Job*. Houghton Mifflin Company.
『ひとまねこざる』光吉夏弥 (訳). 1983. 岩波書店.
- Varley, S. 1984. *Badger's Parting Gifts*. Lothrop, Lee& Shepard Books.
『わすれられない おくりもの』小川仁央 (訳). 1986. 評論社.
- Williams, G. 1958. *The Rabbits' Wedding*. HarperCollins.
『しろいうさぎとくろいうさぎ』まつおかきょうこ (訳). 1965. 福音館書店.
- Yolen, J. (text) & Schoenherr, J. (illustration). 1987. *Owl Moon*. Philomel Books.
『月夜のみみずく』くどうなおこ (訳). 1989. 偕成社.
- Zion, G. (text) & Graham, M. B. (illustration). 1965. *Harry by the Sea*. HarperCollins.
『うみべのハリー』わたなべしげお (訳). 1967. 福音館書店.